

バレーボール競技者の障害者スポーツへの理解度に関する研究 —障害者バレーボールに着目して—

中尾 純海 (生涯スポーツ学科 地域スポーツコース)
指導教員 河西 正博

キーワード：バレーボール，障害者，理解度

1. 緒言

障害者バレーボールは、精神障害・身体障害・視覚障害・聴覚障害・知的障害の障害種別にルールや競技特性が異なっており、様々な展開がなされている。

保井ら(2008)は、障害者スポーツの認知度は「メディアへの露出度と関係があると考えられている」と述べているが、これらのように障害者スポーツ種目の全般的な認知度を調査している研究は多いが、特定の種目に着目した研究は少ない。そこで、本研究は、高校生・大学生のバレーボール競技者を対象にアンケート調査を行い、障害者バレーボールに対する興味・関心・理解度を検討することを目的とする。

2. 研究方法

2016年11月、K府・O府の高校およびO府・S県の大学でバレーボールを行っている男子、女子競技者を対象にアンケート調査を実施した。配票は各校訪問時に行い、アンケート記入後その場で回収を行った。なお、回答者数は118名であった。

主なアンケート項目は、障害者スポーツとの関わりについて(体験種目、直接・間接観戦の有無)、障害者バレーボールの経験・関心について(体験の有無、関心の有無)、障害者バレーボールの認知について(精神障害・身体障害・視覚障害・聴覚障害・知的障害毎のルールや特徴など)等である。

3. 結果と考察

障害者スポーツおよび障害者バレーボールの経験・意識について、障害者スポーツの経験があると答えた回答者は19名(16.2%)、障害者バレーボールの経験があると答えた回答者は10名(8.5%)であり、障害者バレーボールを含め、障害者スポーツそのものを体験する機会が少ないことが明らかとなった。また、直接観戦したことがあると答えた回答者が12名(10.2%)で、間接観戦したことがあると答えた回答者は72名(61.0%)であり、体験そのものだけでなく、観戦場面においても直接的に障害者スポーツに関わる機会が少ないというこ

とがいえ

とがいえ。障害毎にバレーボールの競技があることを「知らない」と答えた回答者が78名(66.1%)に上っており、バレーボールを競技的にやっている回答者であっても認知度が低いことが明らかになった。障害者バレーボールの体験の有無について、シッティングバレーボールの体験者が7名(5.9%)と、関連種目の中では最もテレビや新聞等のメディアに取り上げられることが多いことから、シッティングバレーボールの認知度が高いと考えられる。一方で、その他の障害者バレーボールはルールや特徴がほとんど知られておらず、認知度は低かった。今後、メディア等への露出を増やし、各障害者バレーボール種目を定期的に体験する機会を設定することや、大会等に積極的に健常者が参加できる場を作ることが必要と考えられる。

4. おわりに

調査結果より、障害者バレーボールを含め、障害者スポーツそのものを体験する機会が少ないことが明らかとなった。障害者バレーボールの認知度は、メディア等の露出に大きく関係していることから、シッティングバレーボールの認知度が高く、その他の障害者バレーボールの認知度は低かったものと考えられる。今後、メディア等への露出を増やし、障害者バレーボールの種目紹介や定期的に体験する機会を設定し、積極的に健常者が参加できる場を作ることが必要だと考えられる。

引用・参考文献

保井俊英・永田隆子・濱屋桃子・三上真二(2008)「障害者スポーツ」に対する意識レベルについて：障害者スポーツ中級スポーツ指導員取得に結びつけるためには。武庫川女子大学紀要。56：127-131。